学校課題解決研究報告書

子どもの具体的な姿を語り合う授業研究

～抽出児活用による教師の語りの変容～

横浜国立大学教育学研究科高度教職実践専攻
玉虫　麻衣子

１．学校の現状と課題

Ａ小学校では、９年間生活科・総合的な学習の時間の研究に取り組み、子どもの姿に着目した授業研究を行うために抽出児の活用に取り組むこととなった。抽出児のもつ「関連追及機能」（田上哲,2009）により、他の子どもの姿をとらえることや教師の手立ての振り返りにつながることが期待される。しかし、予備調査によれば、第１回、第２回の事後協議会では抽出児について語られたのは１回のみであること、そしてその状況についてＡ小学校の教師は抽出児を活用できていないと捉え、何らかの手立ての必要性を感じていた。

２．研究の目的

先行研究、Ａ小学校への調査から、２つの仮説が立てられる。１つ目は、子どもの具体的な姿を語り合う授業研究を実現するためには、抽出児の設定や見取り、活用の方法について共通理解を図る必要があるのではないか。２つ目は、抽出児を中心に子どもの具体的な姿を語る授業研究に取り組むことにより、教師が教育的瞬間をとらえることができるのではないか。

そこで、本研究では研究主題を具体化した「学校として目指す子どもの姿」の共有と抽出児設定の視点の明確化、抽出児の活用方法について検討・共有する研修会を実施することにより、抽出児を中心とした「子どもの具体的な姿」をもとに授業を振り返る事後協議会を実現させることを目的とする。さらに、事後協議会において「子どもの具体的な姿」を語り合うことを通して、質的な深まりとしての「教育的瞬間」をとらえられるようにすることを目的とする。

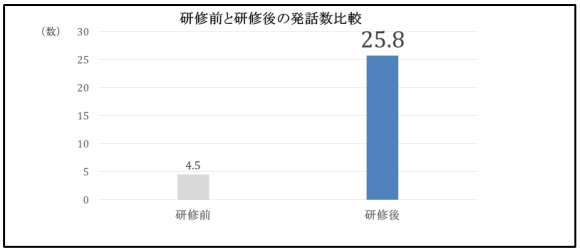
３．研究の方法

抽出児の設定や見取り、活用の方法について共通理解を図るために、研修会を実施する。その内容は、①「学校として目指す子どもの姿」の設定②抽出児の設定の視点③授業研究会の各段階における手立てである。それにより事後協議会において子どもの具体的な姿を語ることで、教師の語りがどのように変容したのかを検証する。

４．結果と考察

本研究の結果、事後協議会における教師の発言の分析から、抽出児を活用することで、「子どもの具体的な姿」の発話数が研修前よりも研修後は増加した。（図１）

また、発話数だけでなく、発話者も増え、継続して取り組んだ２



年目の授業研究においては、事後協議会の参加者数のうちほぼ全員が具体的な子どもの姿を語っていたことが明らかになった。

教師の語りは若手、ベテランいずれにおいても「教育的瞬間」（VanManen,1991）をとらえる発話が確認された。研修前と比較すると、研修後は授業者に具体的な場面をもとに代案を提示する発言が見られた。また、授業者が気付かなかった子どもの具体的な姿について語ることで、新たな視点(秋田,2014)を授業者に促すことができていた。以上より、抽出児設定や見取り、活用の手立てについての共通理解を図り、実践することにより、「子どもの具体的な姿」をもとに語り合う事後協議会が実現されたといえる。

全体発言数自体の増加も確認されたことから、抽出児の活用が事後協議会の活性化に大きく寄与したことが示唆される。授業研究において抽出児を活用するためには、授業者がただ数人を選出するだけではその効果が機能せず、授業者が抽出児の「期待する変容」を具体的かつ意図を持って設定すること、そしてそれらを非授業者と共有する必要があることが明らかになった。本研究を通して、研究主題を具体化した「学校として目指す子どもの姿」の基盤となるものを作成できたのは一つの成果である。しかし、その資料がより活用されるためには、妥当性の吟味と焦点化の必要があると考えられる。また、授業者が研究１年目ほど抽出児を選出す際に迷わなくなったと述べていたことからも、研究の継続の有効性が示唆された。

主な引用文献

田上哲　2009　授業研究における抽出児に関する基礎的考察　九州大学大学院教育学研究紀要　第11号
VanManen,M　1991　Reflectivity and the pedagojical moment. Journal of Curiculum Studies,２６（６）
秋田喜代美　2014　対話が生まれる教室　教育開発研究所